

伴大納言繪詞に就いて(上)

源 豊 宗

一 圖 様

小脇に長刀をかい込み、うしろを振りかへりながら、足は宙を飛んで馳せ行く雑色の姿ともろ共に、奔騰する栗毛の馬に跨つて、これももうしろを振り向いて、ゆん手に弓をさゝけ鎧に身を固めた武者の姿が現はれる。次にも騎馬武者、又騎馬武者。その騎馬武者の續く先きには、素足で驅け行く雑人の群が見える。更に松明を振りかざしつゝ走る二人の雑色の慌しい姿態。續いて見えるのは、或は烏帽子を兩手で抑へ、或は袴の裾をとり、風を切つて走る人々の群である。うろたへてうしろに走る者があり、礫の様に飛び行く沙門もある。……これが伴大納言繪詞の上巻を繙いて、先づ觀者の眼に飛び込んで來る圖様である。吾々は此の何か事ありけな、豫感に充ちた畫面に誘はれて、慌しい群衆のあとを追つて、なほも巻をくりひろげて行く。やがて宏壯なる大門に至る。こゝにも潮の様に門の中へと駆け込む人々の姿がある。仰けば門の屋根にはけたましく羽搏く小鳥が見え、すでに火の粉が劇しく降りかゝつてゐる。門を入ると群衆の足はもうそこに淀んでゐる。然し喧々囂々たる群衆の渦である。見よ、彼等の眼の差す方に

は、紅の火の粉を含んだ濛々たる黒煙が吹き靡いてゐる。烈々たる火氣に堪えかねながらも物好きな群集は扇を額にかざしつゝ、一心に見つめてゐる。即ちその向に、人は炎々として燃えさかる煙と焰の渦の間に應天門の屋根の一角が深刻に浮んでゐるのを見るのである。門の彼方の側には會昌門を背景に大宮人の一群の、流石にこゝではむしろ恐怖に充ちた、又悲痛のこもつた表情と姿態とが描かれてゐる。畫面は會昌門を以つてしばし休止に入り、唯僅かに廻廊の屋根の一端を空に浮かせて、二尺ばかりの空白の後、衣冠束帯の人を庭上に立たしめ、更に清涼殿をあらはし、殿上には衣冠の人と相對して緋袴を召し給ふた主上を描いてゐる。かくて此の繪詞の上卷は終つてゐるのである。

中卷を繙くと、先づ詞書が現はれる。「おとゝはつゆをかしたる事なきに、かゝるよこさまのつみにあたるをおほしなきて……」日の裝束をつけ庭に荒蕪をしき天道に訴へ、その程にも一族皆悲嘆にくれてゐると、赦免の使が向けられ、今までの悲しみが喜にかはつたといふ條がしるされ、それに續く一段の繪は木立のもとを馳せ向ふ赦免の使、更に庭上には荒ごもをしきて天に禱る日の裝束の源信、ユキノ屋内には泣き悲しめる一族の女房達を寫してゐる。此の一段が終つて次に「あきになりて右兵衛のとねりなるもの……」といふ書き出しで彼が深更家路を歸る途中、伴大納言父子の應天門に放火したのを目撃し、後罪が左大臣源信に被せられた事を知つて、いとほしと思ひつゝも事實を口外せずにはゐるが、此の舍人の近くに住む伴大納言の出納が、子供のいさかひに主人を笠にきて己が子を餘りにむごく蹴飛ばしたのを憤り、遂に汝が大納言も己の口一つで如何ともなるのだと口をすべらしたといふ長い詞書が續く。そしてその後には右兵衛の舍人の子と、伴大納言に仕へてゐる出納の子との喧嘩の場面が、興味深く描寫されてゐる。かくて

中卷は終となる。

下卷は、「このいさかひをみるとてさゝなりのひといちをなしてき、ければ……」噂はひろがつて、遂におほやけに此の舍人は召されて鞠問され、事實を告白したといふ詞書があつて、人の祕密に興味を持つ卷の人々の、噂を耳から耳へ風のように云ひ傳へる風姿が描かれ、更に「その、ち大納言もとられなとしてことあらはれてのちなんなかされる……」といふ詞書につゞいて、伴大納言の館へ召し捕りに向ふ檢非違使の行装ものものしい一群、身もよもあらず嘆きにひたれる大納言の一門、而して網代車に乗せられ前後をまもられて配流の途に上る一團がづらね畫かれて、此の繪卷は終つてゐるのである。

二 詞 書

此の伴大納言繪詞の詞書の本文は、宇治拾遺物語の中に見えてゐる「伴大納言應天門を燒く事」といふ一條と、僅かな字句の出入の存する外、殆んど全く一致してゐる。そこに此の兩者の間に密接な關聯の存する事は云ふまでもない。寺社の縁起や祖師の行狀を描寫せる如き、記念性の濃厚な繪卷に於いては、その繪卷自身の爲めに詞書の本文が作製されるのを常とするが、物語的な主題を描寫せる繪卷は、その物語がすでに一個の文藝的作品として民衆の間に親しまれて後、その繪畫化の企てられるのを普通とする。最初より挿繪を伴つて流布したものも存したと思はるゝ室町時代のお伽草紙の如き例の、吾々は鎌倉時代まで溯らし得る作品を知らない。尤も稀には吉備入唐繪の如く、古事

談の漢文的詞章を和語に直譯せる例もあるが、それはたゞ／＼原據が漢文體であつたからである。随つて此の伴大納言繪詞の本文も、此の繪卷の爲めに書き卸されたものでなく、既に行はれてゐた文藝的作品を拾ひあけて繪としたものであると見るべきであらう。その場合此の繪詞の本文が宇治拾遺物語から採擇されたと見るのは一應尤もな考へ方である。宇治拾遺物語の著作年代に關しては、此の物語の中に見ゆる「東大寺華嚴會の事」の文中に、鯖の木の話を語つて三十四年前まで葉は書くて榮えてゐたのが枯れて、その後も立つてゐたが、「この度平家の炎上に焼け終りぬ」と書かれてゐる事から、治承四年より稍後の編纂である事が明かであり、又中には後鳥羽院といふ語句も見え、後人の書き改めでないとすれば、それは後鳥羽院の崩御以後に下る事となるが、何れにしても現在の宇治拾遺物語が鎌倉時代に入つて成立した事は疑へない。然し此の宇治拾遺物語は一種の説話集であつて、今昔物語や古事談、打聞集と内容を同じくするものが多く、殊に今昔とは八十六の一致するものを有してゐる。而して宇治拾遺の文章は、例へば寶物集や著聞集等に比して著しく古調を帶び、編纂者が古き説話の素材のみを得て自らの文章で綴つたものでなく、むしろ古き説話集に多少の補訂を加へたといふ程度を出でないものと考へられる。それ故前記の東大寺の鯖の木の條の如きは、まさしく文章の調子に他の部分と異つて鎌倉的平明さを帶びてゐるのを覺える。後人の加へたものではあるが、宇治拾遺の序に、宇治大納言源隆國が輯めた説話集十五帖の正本が、傳はりて侍從俊貞といひし人のもとにあつたが、後にさかしき人々更に之れに書き加へたのが本書であるといふ意味の事を述べてゐるのは、或はむしろ眞を傳へたものかと考へられる。寶物集卷一に「宇治大納言隆國の物語には云々」とあるのも、源隆國に説話集のあつた事實

を物語つてゐる。随つて此の伴大納言繪詞の本文は、或はその宇治大納言物語といふ如きものから採られたのではなかつかとも考へ得るのである。それと共に一部に考へられてゐる様に、宇治拾遺が此の繪詞を採録したとする如きも、兩者の本文の關係を比較する時は到底肯定し難い。例へば、中卷第二段の詞書に、右兵衛の舍人が「よふけてゐるにかへるとて應天門のまへをわたりければらうのわきにかくれたちてみるに……」とするされてゐるが、何故に舍人は廊の傍に隠れ立ちて窺つてゐたか、此の文章では意味がとほつてゐない。然るに宇治拾遺の本文では「夜更けて家にかへるとて應天門の前を渡りければ、人のけはひしてさゝめく。廊の腋に隠れ立ちて見るに……」とあつて隠れ立つた原因がこゝで明にされてゐる。これなどは當然詞書が原文を寫した時の脱漏と見なければならぬ。

此の繪卷に於ける詞書の原據を問題とした私は、更にその詞書の他の問題に就いて觸れて見たい。此の繪卷の上卷は開卷直ちに繪が現はれて來るのである。そして二丈七尺の長尺の畫面の終りまで、觀者は遂に詞書に接し得ないのである。一般繪卷の概念に於いては、先づ詞があつて、後に繪がある。それ故に伴大納言繪詞は卷首が甚だ痛んで、そこにあつた詞書も失はれたのであると一般に解釋されてゐる。然しはたしてさうであるか。

此の繪卷は、現在舊若狭小濱藩主酒井伯爵家の所藏にかゝるのであるが、かつては小濱の東約一里をへだてた松永庄の八幡宮に存したのであつた。嘉吉元年四月殊の外繪卷を御愛好あらせられた後崇光院は松永の此の繪詞の事を聞召され、社家に命じて京都へ齎しめ給ふた。事の仔細は看聞御記に見えてゐる。

廿六日(前略)抑若州松永庄新八幡宮ニ有繪云々、淨喜申之間、社家へ被仰て被借召、今日到來、有四卷、彦火々出見命繪二卷、吉備大臣繪一卷、伴大納言繪一卷金簡筆云々、詞之端破損不見、古弊繪也、然而殊勝也(下略)

此の御記事によつて、足利時代の初期すでに此の繪卷の首に詞書を缺き、そして詞の端破損して見えすと解せられた事が知られる。そして中卷には聖の如く先づはじめに詞書が置かれてゐるが、宇治拾遺の本文と比較する時、約二紙分の文章が缺けてゐる事となるのである。即ち「今は昔、水尾の帝の御時に應天門焼けぬ。人のつけたるになんありける。それを伴善男といふ大納言、これは信の左大臣のしわざなりとおほやけに申しければ、その大臣を罪せんとせさせ給ひけるに」忠仁公良房が、帝を諫めて事をよく糾して行はせ給ふべき旨奏したといふ意味の文章が缺けてゐるのである。随つて一般には第一卷のはじめに此の二紙分の詞書があつたと想像されてゐるのである。

然るに中卷を見ると、第二段の詞書の前半には「あきになりて右兵衛のとねり」が夜更けて家に歸るさ、應天門よりひそかに降りる伴大納言父子を見つけ、不審に思ひつゝ、來ると、「内の方に火ありとてのゝしる。みかへりてみればおほうちのかたと見ゆ。はしりかへりたればかみのこしのなからはかりもえたるなりけり」といふ應天門の事件がこまかに記されてゐる。而して第二段の繪は單に子供の喧嘩の場面のみである。此の畫面に對照さるべき詞書としては、それは極めて縁遠いものであるといふのではない。それは實に上卷の應天門炎上の圖を説明すべき詞書に外ならぬ。その上卷の詞書としての適切さは、上卷の首にかつてあつたと思はれてゐる「今は昔水尾の帝の御時に應天門焼けぬ。人のつけたるになんありける」といふ、火事に關しては唯これだけの敘述しかない章句に比し、如何にたちま

さつてゐるか敢へて云ふまでもない。云はゞ上卷の繪が中卷に於いて、あとから説明されてゐるのである。あとに説明を持つ限り、はじめに説明が無くとも濟む筈である。あれば重複である。それ故に私は此の繪卷の上卷の卷頭には、最初より詞書が無かつたと考へるのである。

然しはたしてかゝる卷頭に詞を省く繪卷形式の例が他に見出し得るであらうか。私はかゝる形式の類例として先づかの信貴山縁起繪卷をあける事が出来る。即ち此の繪卷も、伴大納言と同じく上中下の三卷に分れ、中下卷には型通り詞と繪とが交互に配されてゐるが、上卷のはじめに詞を缺いてゐる。そしてそれは上卷の卷首が破損して詞書が脱落したものであると説明されてゐる。上卷は、信貴山の命運が飛ばした鉢に乗つて釐の長者の米倉が虚空はるかに山上に運ばれた話を、一卷を埋めて描いてゐるのである。此の信貴山縁起の詞書の本文も、伴大納言繪詞に於けると同じく、全く同一の文章が宇治拾遺物語に存してゐるのであるが、宇治拾遺の本文によると分量にして約四紙分の詞が足りないのである。然るに中卷を繙くと、

このはちにこめをひとたはらのせてとはするにかりなとのつゝきたるやうにのこりのこめともつゝきたりたり……といふ飛倉の話を語る詞に連續して

かやうにおこなひてするほとにそのころゑむきのみかどなうおもくわつらはせたまひて……

と、醍醐天皇よりの御勅使が來つて、命運に加持を請ふ願末がしるされ、その次に勅使下向の情景が描かれてゐる。

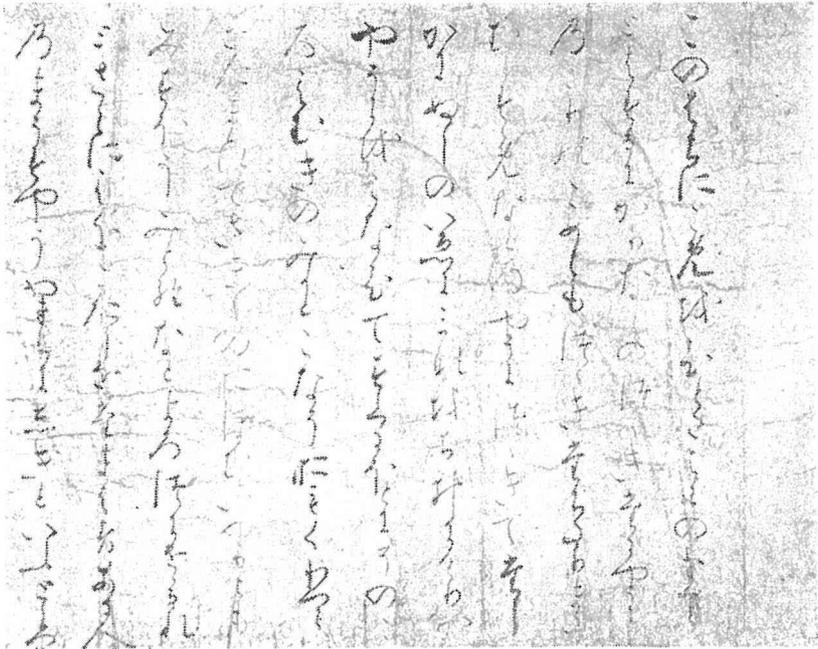
全然内容の異なる此の勅使下向の畫面に飛倉の説明が併せ記されてゐるのである。若し上卷に最初詞書があつたとしたならば、何故にその一部を分割して全然關係のない個所に併せ記したかの理由を解し得ないのである。人或は此の飛倉の話語る詞がもと上卷に存したのが、誤つて中卷のはじめに加へられたのではないかと疑ふかも知れない。然るに此の疑は實物を見る時直ちに解消する。即ち飛倉の話に屬する最後の幸句「たしかにぬしのいゑにみなをちるにけり」といふけりのりに續いて「かやうにおこなひて」のかが、同一の紙のしかも同一の行に、書き續けられてゐるのである。決して後に貼りつがれたものではなく、最初より延喜加持の段の畫の直前に飛倉の詞書が存したのである。然し人は又疑つていふかも知れない。飛倉の卷の説明としては、此の中卷のはじめに記された僅か五行の幸句は、それは此の話の終末の一端に過ぎない。それだけでは飛倉の説明にはならない。それ故に宇治拾遺本文から想定される、詞書に直して約七十行の飛倉物語は上卷にあつたのであると。且つ、此の中卷の詞の最初に見える飛倉關係の五行の幸句は、約七十行の詞書を有する事によつて上卷の尺が長きに過ぐる爲めに、分ちて此の五行を中卷のはじめに繰越したのであると解する學者もある(下唐靜市氏「信貴山緣起詞書」の問題「美術研究第六十六號」)。吾々は、僅か五行五寸にも足りぬ節約をなさんか爲めに——と論者は云ふが、上卷は中卷に比して一丈三尺短い。たとへ七十行四紙分の詞書が上卷にあつても、なほ中卷より六尺も短かい。五寸の節約とは抑、何の意味か——敢へて苦しんで無關係な個所に繰込む必要があつたか之れを解するに苦しむのであるが、それよりも私は論者が重要な事實に注意してゐない事を指摘しなければならぬ。といふのは中卷の第一段の詞書には明らかに卷首に缺失の存する事である。即ち中卷を開くと見返しに續いて、

不思議にも約一寸七分の幅の極めて狭い繼ぎ足しがあり、此の繼ぎ足しを第一紙とすれば、詞書は第二紙の端から書き出されてゐる。一般に詞書の端は、卷首ならばなほさらの事、餘白をおいて書き出すのであるが、此の中卷第一段の詞書は卷首としての餘白をこしらへる爲めに一寸なにかしの繼ぎ足しを必要としたのである。此の事は中卷第一段の詞書の現在の發端が、最初からさうであつたのでなく、更にその前に若干の詞書が存在した事を暗示するものにならぬ。而してその詞書が上卷の飛倉に關する事は勿論であつて、現在の卷頭の「このはちにこめを……」といふ章句そのものが、宇治拾遺によると、「たしかにわれはこひてとらせんとて」といふ前の語をまつてはじめて意味の成立する字句なのである。此の事によつて、信貴山縁起も明かに、上卷の畫面に妥當する説明は中卷に存した事が明かである。それ故に若し上卷に詞書があつたとすれば、飛倉の繪と無關係な命運の毘沙門感得譚であつたといふ不合理に逢著しなければならぬであらう。かくて一つの繪卷の發端に詞書を特に廢して、直ちに繪を以つてはじめる一種の繪卷形式が存した事を認める事が出来るであらう。

然しかゝる繪卷形式が存在する事には、そこに必然な理由がなければならぬ。元來繪卷に詞書が結合する事には文藝的興味、歴史的興味及び説話的興味の何れか若くはその複合に由るのである。文藝的興味にもとづくものは、いふまでもなくその文藝作品としての詞章が主要な意味を持つ事當然である。歴史的興味とは個性的内容とその記念性とを重要な契機とするものであつて、當然歴史的敘述としての詞章を缺く事が出来ない。然るに説話的興味の對象

は、内容そのものであつて文藝作品としての詞章ではない。それは直接に繪畫に於いて説話を求めるのである。それ故に詞書と繪との緊密な相對性が破れてもそれは必ずしもあやしむには足りない。そこには繪をして、自から詞書の羈絆を離れて、奔放な飛躍を振舞はしめる自由が許されてゐる。伴大納言繪は信貴山縁起と共に、まさしくかゝる類型に屬する繪卷である。

此の伴大納言繪の最も著しい特色は、上卷の長さ二丈七尺の全卷連續して、息つく暇もなく、繪より繪へと畫面が展開して、一つの畫面を構成してゐる事である。尤も卷尾五尺ばかりは良房の參内が描かれ、之れを別の畫面と見るとしても、なほ二丈を超ゆる「應天門の火事」が一畫面として描寫されてゐるのである。此の繪卷の特色は又かゝる火事場の慌しい情景を、その活躍に充ちた筆致を以て表現してゐる事である。その火事場へと馳せ向ふ人馬の姿態の活潑な運動と、豊富な變化とは、恰かも谷川の岩に激しつゝ、奔流し行く概を示してゐる。而して此の奔流にも比すべき畫面の急調子テンポは、開卷直ちに觀者を此の血眼になつて走り行く群衆の渦の中に巻き込み、群衆と共に走らしめずにはおかない。作者は觀者を此の畫面の群衆の一人として豫想してゐる。實に此の觀者をせき立てる様な奔流的畫面は先づゆつくり詞書を讀んで、而してその後此の畫面を辿るといふ如き手ぬるい鑑賞にそぐはないのである。否、むしろ詞書を讀んでは、此の畫面の機智はその一半を失ふのである。作者は觀者をして何事かと、群衆の大路をの、しり走る渦にまぎれ込ましめ、行きつく所まで行かして、ぱつと事實を投げ出さうと企て、ゐるのである。彼は餌をこぼして陷阱に獲物をひきつける獵師の様に觀者をつるのである。答を先に與ふる謎が意味がないならば、此の繪



(首卷) 書詞卷中卷繪起緣山貴信

も説明をあとへ保留してこそ興味があるのである。此れ等の事は信貴山縁起の上巻に於いても同様である。命運の奇蹟によつて山麓の長者の米倉が鉢に乗つて虚空遙かに飛び行く驚異の光景に、観者は我れを忘れて畫面を追ふのである。繪は詞よりも雄辯にそのストーリーを敘述してゐるのである。之れを見るものは恐らく詞書からの豫備知識の無い事に不自由を覺えないであらう。そして第二巻に至つて徐ろに精しい説明が與へられるのである。それだまことに充分ではないか。此の場合信貴山繪巻の三巻の長さの割合から上巻が著しく短いといふ理由をあげて、上巻に詞書の存在した事を證明せんとする説も(下店氏前記論文) 漠然たる從來の逸失説に一つの理由を與へんとする努力として一往敬意を拂ふべきであるが、中巻に飛倉譚の詞書があつたとせざるを得

ない以上、事實が機械的な寸法論と背馳するのを如何ともし難い。況んや現在は三卷である信貴山縁起も、伴大納言繪と等しく、最初は一卷仕立てであつたと考ふべき理由が存するのである。既に記した如く看聞御記には伴大納言繪一卷と記されてゐる。それは三卷の中一巻のみが若狭より齎されたものと、一般には理解されてゐる。然し朝廷より借出しを請はれて、態々若狭より進覽するのに三卷の中一巻だけを奉つたとは考へ難い。恐らく當時は一卷に仕立て、あつたと考ふべきであらう。下巻第一段の詞書の端は卷首らしい餘白を有するも、此の程度は卷の中途でも屢々見る所で、源氏物語繪卷、吉備入唐繪、紫式部日記繪に類例がある。而して信貴山縁起も一卷であつたとする事に矛盾を見ない。そして吉備入唐繪も八丈を超ゆる長さを以つて一卷仕立てであるが、三巻で約十二丈の信貴山縁起が一卷であつても吉備入唐繪に比し、一巻の太さは半徑にして三分弱大きくなるに過ぎないのである。然らば、各巻の寸法の割合からする、上卷々首の詞書逸失説は必ずしも當を得たものとはなし難い。

三 製 作 年 代

此の繪卷が畫かれたのは何時かといふ問題は、今日の學界に於いては、大體に於いて、十二世紀の末葉とする見解が行はれてゐる。かゝる見解の根據は、その畫風に於いて此の伴大納言繪詞と極めて顯著な類似を有する年中行事繪卷が、光長の筆と傳へられてゐる事に存する。

此の光長の筆と傳へらるゝ年中行事繪卷は、もとは六十卷を存したが、現在は住吉如慶が寛文二年寫す所の模本な

ど十九卷を傳ふるのみで、原本は恐らく延寶元年皇居炎上の際焼失したものの様である。此の年中行事繪は古今著聞集に見ゆる、後白河院御時年中行事を繪にかゝれて御賞玩あらせられたといふそれに當るものと考へられ、又山科言繼卿記天文十八年九月十一日の條に土佐光茂と共に拜覽したといふ年中行事繪三卷といふのもそれであると考へられるのであるが、此の言繼の日記には「奥書天平元年トシ、光長秀能言、等筆也」と記されてゐる。此の記載には多くの不安はあるが、天平は仁平の誤記とし、光長秀能言能等の共作とする事が最も合理性に富んでゐるとする福井利吉郎氏の解釋(同氏「繪巻物語説」喜波講座日本文學)に一往同意しなければならぬ。勿論光長等を筆者とする事は、此の言繼の日記の上では必ずしも奥書の記載と解し難く、恐らくは此の繪巻に就いての所傳であつたのであらう。此の所傳が江戸時代にも傳はり寛文二年の模本にも繪者光長とししてゐる。然し室町時代以來の此の所傳は、江戸時代に古筆家がその自己の鑑識を以つて古筆や古畫の作者を擬定してゐるのは同一視し難いから、何等か此の繪巻に就いてかゝる傳へが附屬してゐたかとも思はれる。それ故に光長がその作者の一人であつたとする事は、今の場合之を肯定しなければならぬであらう。然し、六十卷の浩瀚な繪巻が云ふまでもなく幾人かの共同製作と見られる限り、光長の分擔したのもその幾卷かに過ぎないとすれば、今日残された三分の一に足りない模本の中、その何れを光長の藝術として定むべきかは、之は光長の確實な遺品を残さない今日、殆んど不可能に近い困難としなければならぬ。而して光長が建春門院御願の最勝光院の御所の障子に、後白河法皇や女院の日吉御幸や平野行啓の様を隆信と共に畫いたといふ事實は光長が當時すぐれた作家の一人であつた事を物語つても、彼の外にも此の種の畫事に堪えた作家とし

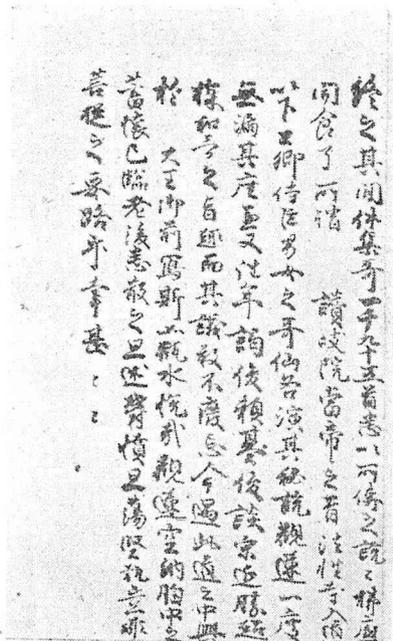
て、承安元年院宣を奉じて後三年合戰繪卷四巻を畫いた明實があり（康富記、文安元・閏六・廿三）、治承二年兼實の命によつて彼の息長通中將が供奉せる蓮華王院御幸の繪を畫いた頼源があり（玉葉、治承二・正・十四）、其の他元暦元年大嘗會の御屏風の製作に従事した藤原有宗等が居る（山禮記、元暦元、八、廿二）更に繪佛師には智順、常明、宅間爲遠父子等實に錚々たる作家が當時嚮をならべてゐた。繪佛師が佛畫のみを畫いたのでなくして、等しく世俗畫を畫いた事は改めていふまでもない。蓮華王院御幸圖の筆者頼源は繪佛師であつた。常明の如きは當時最も傑出した大和繪の作家として喧傳された人であつた。それ故に最勝光院の障子を畫いたといふ事實から、光長を以つて當時の最大の作家となし若くは建春門院專屬の畫家とする事は、恐らく當を得たものとはなし得ないであらう。かくの如き事情に於いて、年中行事繪卷と伴大納言繪詞の作風の類似を、直ちに光長の名に於いて處理する事は躊躇せざるを得ないのである。然しながら年中行事繪との作風の著しき接近は、兩者の作家が同一であつたとする事も可能であり、少くともその製作年代の兩者極めて相近きを思はしむるに充分である。随つて後白河法皇の御代を伴大納言繪詞の時代と認むる事は、ほゞ許されていゝであらう。こゝで兩者の作風の比較を當然なすべきであるが、それは此の繪詞の作風を考察する際に托して、今は更に別個の方面よりその製作年代を考究して見よう。

此の伴大納言繪詞の詞書の筆者は、年中行事繪のそれと同じく一般に飛鳥井雅經の筆とされてゐる。此の兩者はいかにも同一書風と考へられるが、年中行事繪の方は、寛文二年の住吉家の模本に詞雅經卿と記されて居り、伴大納言

繪に於いては恐らく寛政七年松平樂翁の編した類聚目錄に詞參議雅經卿と記したのが最も古いであらう。雅經は承久三年三月五十二歳で歿したのであるが、彼の確實な筆蹟には彼の手になる熊野懷紙がある。そして之れを此の詞書と比較すると、兩者に多少の距離が存すると共に、又相互に字形の類似したのもも尠くない。年中行事の詞が雅經と鑑定されたのも、熊野懷紙等との類似からでもあらう。しかも此の熊野懷紙と較べて雅經の筆と信ぜられて來た今城切の一類と、此の詞書とが全く同筆である點などよりして、此の詞書の雅經説は比較的安固な支持を與へられて來たのであつた。それ故に從來此の伴大納言繪そのものも雅經の時代を其の製作年代とも考へられたのであつた。そして事實そこには此の考へを不可能ならしむる著しき困難も存しないのであつた。然し一方、到底雅經時代までは下り難い傳隆能筆源氏物語繪卷の詞書の中に、雅經筆と古筆家の鑑定し、且つかにも雅經的なる書風の存在する事實は、雅經的なる書風の故に、直ちに彼の筆、若くは彼の時代なりとなし難きものゝ存する事をも認めなければならぬのである。雅經以前に雅經的書風の存在しても何等あやしむるに足りない。それ故に此の伴大納言の詞書もその表面的類似より直ぐ之れを雅經に歸する事の不可なるは云ふまでもない。

然るに最近此の詞書の筆者に就いて私は畏友伊藤壽一氏から極めて傾聽すべき新説を呈示せられた。私は氏が之れを學界に公にせらるゝに先んじて、本稿に援用する事を快諾された寛容に對して心からの謝意を表したい。伊藤氏は伴大納言筆と同筆と思はるゝ今城切の筆者は雅經にあらずして、實に藤原教長であるとされるのである。今城切は古今集の寫本の斷簡で諸家に散在してゐる。然るに今城切は古く古筆家によつて雅經と極められてゐるのであるが、前

述の如く、或は熊野懷紙等との比較からでもあらう。それは可なりな程度の鑑識であつたと云はなければならぬ。然るに三井男爵家に今城切の奥書の後半が藏せられてゐる。それは眞名もて記されたもので、その中に觀蓮即ち藤原教長の書寫せる旨が述べられてゐる。勿論此の奥書は世にも知られてゐたが、既に早く今城切が雅經の筆と信ぜられて來た古筆界に於いては、そこに疑をさしはさむ餘裕もなく、之をも雅經がそのまゝ書寫せるものとして通つて來つ



たのである。然るに伊藤氏の慧眼は此の舊説より離れて、率直に此の奥書を觀蓮の筆として理解されたのであつた。さう云はれて見ればむしろさう解釋する事が當然であつて、これを雅經の筆とする事が反つて學問的には不可能である。教長は當時歌人として知られてゐたのみでなく、亦すぐれた書家として重んぜられ、彼が治承元年高野山で口授したといふ才葉抄は入木道の寶典として尊ばれて來てゐる。彼

は壯年崇徳天皇に奉仕してゐたが、保元の亂に坐し、仁和寺に逃れて落飾し觀蓮と號した。然し赦されずして常陸に配流せられ、居る事六年にして歸洛した。その時彼は五十五歳を稍越えてゐた様である。彼の歿年は明かでないが、治承二年三月十五日上加茂で行はれた歌合に觀蓮の名が見え、述懐といふ題にて

數ふれば身は七十ぢをへぬれどもまだみどり子の心地こそすれ

と歌つてゐる。その後の彼の消息は文獻の上から途絶えて了うが、新古今集卷八哀傷中に見ゆる寂蓮法師の歌の詞書によつて、彼が高野山に籠つてそこで亡くなつた事が知られるが、それは治承二年の後久しからざる事と考へられる。

伴大納言繪と今城切とが筆者を同じくする事に就いては、既に伊藤氏は清閑第三第四の兩號に互りて詳かに論證せられ、私も氏の所説に同意する者であるが、此の事は自から伴大納言繪の下限を限定するものと云はなければならぬ。殊に伊藤氏の調査によつて此の一見壯年の流暢さを有する今城切が治承元年教長の晩年の筆である事の知られたのは意義が深い。何となれば同じく今城切に似た此の伴大納言繪の詞も彼の晩年期の筆である事が思はれるからである。なほ此の教長と雅經の書風とは恐らく師資關係が辿られるもの、如く、かく推定するに充分な資料も現に發見されてゐるが、それ等の事は教長自身の書風の問題と共に伊藤氏の發表に期待する所である。

然るに、此の伴大納言繪の藝術的感興が明かに應天門の火事に集注されてゐる事は、恐らく何人も感を同じくする事であらう。若しも單に伴大納言物語を描くに過ぎないならば、よし此の火事が物語の發端であつたとしても、三卷の中一巻が、説話的内容の稀薄な火事騒ぎに費さるゝ事は、説話の描寫として不當に過重であると云はねばならぬ。例へば舍人が夜更けて應天門をかゝぐり降りる大納言父子を窺つてゐる場面の如きは此の機智的な作家にとつては好個の題材でもある。そのみならず、それは此の物語一篇の指導的な契機でもある。然るに之れを捨て、説話性

の乏しい火事の光景が描かれたといふ事、云はゞそこでは物語を描くのでなく即ち凄然たる火事と、駭然たる群衆とに對する興味を畫いてゐるといふ事には、作家の特殊なモチーフがあつたと考へなければならぬ。そして伴大納言繪詞三卷中最も生彩を發揮してゐるのも此の上卷である。恐らくは此の繪卷の筆者は、かゝる並々ならぬ感興を觸發される如き大きな火事の體驗を持つた人ではなかつたであらうか。

勿論當時の記録を辿つて行くと京中に火事は必ずしも珍しくない。然し安元三年四月廿八日亥刻、樋口富小路より起つた火災は、飛ぶが如く西北に向つて燃えひろがり、遂に大極殿八省會昌門朱雀門と共に應天門をも竊に包んで了つた大火であつた(玉葉)。大極殿の火事はこれ以前には貞觀十八年と天喜六年との二度で、此の安元の火事は天喜以來の珍事であつた。應天門が燒けた!といふその事は、當時宇治大納言物語などに親しんでゐた者にとつては、恐らく伴大納言の話も思ひ出されたであらう。そしてその凄慘なる火焔の狀と、狂奔する群衆の姿とは、恐らく一つのモチーフを作家の心内に透發したでもあらう。かくて伴大納言繪卷の構想が生起した、そして遂にそれが畫かれた。隨つて此の繪卷は治承元年より多くを下らざる時に製作された、と私の臆測は展開する。

それはまことに一個の臆測に外ならない、科學的方法論からすればそれは盛氣樓とも云へよう。然し文化的學問の世界は畢竟直覺に於いて統一されるのである。かゝる直覺が一面に危険を伴ふものでもあつても、時として論理的構造のたしかに見ゆる推論よりも、更に眞實に親しく觸れるものである事を否定する事は出来ない。伴大納言繪上卷の、火事へのあの生氣に充ちた異常な興味は、單に漫然として畫き得る境地ではない。もしさうであるならば、此の

安元の大極殿の大火の體驗こそ、此の作家を驅つて應天門炎上のあのめざましき畫面を畫くに至らしめた最大の原動力ではなかつたか。それは恰かも私が安元大極殿炎上の記事を讀んで、はたと伴大納言繪卷を想起したのと相似たものがありはしなかつたか。

かくて私の此の臆測にして、人の同感を得るならば、伴大納言繪詞の上眼がほゞ定まるであらう。詞書の筆者觀連のほゞ治承三四年頃とされる入滅によつて、その下眼も自から明かであるが、かくして描かれた繪が、かゝるモチーフを受胎した時より甚しく歲月を經てゐないとすれば、伴大納言繪詞は大體治承元年乃至は二年の交に畫かれた事とならねばならない。(未完)